



余命を普通に生きる

松本 侑壬子・ジャーナリスト

人気直木賞作家、重松清の連作短編小説の映画化。がんを宣告された妻とその夫が「その日」までを、恐れや悲しみに潰されることなく普通に丁寧に生きようとする日々を淡々と描く。

小学生の二人の息子の子育てに奮闘中の主婦とし子（永作博美）は、ある日、体の不調を覚え、検査の結果、医師から余命を宣告される。売れっ子イラストレーターでデザイン事務所を営む夫健大（南原清隆）とは下積み時代から苦楽を共にし、今やっと生活も安定し、これから家族4人で賑やかに、という矢先であった。

戸惑いと嘆きと絶望。だが、夫婦は相談しあって「その日」を迎えるための準備をすることに決める。それも子どもたちには気づかれないように普通っぽく、さり気なく、と。その準備とは？

思い出せば、筆者のある知人は、夫婦で思い出の欧州旅行に出かけ（アルプスを背にした彼女の写真は息をのむほどに美しかった）、帰国後は自分の葬儀の手順や通知先を書き残し、美しい挨拶状を手作りしてから逝った。別の友人は、念願のバイロイト音楽祭に行き、魂の震えるほどの感動を伝える便りをくれたが、実はそれは余命宣告を受けた後の一人旅だった、と後に未亡人からの手紙で知った。

死ぬ前にしておきたいこと—主人公夫婦に

としては、まず昔住んでいた町を二人で訪ねることだった。とし子は半ば強引に主治医から一時退院の許可をもらい、18年ぶりのその町に降り立つ。マーケットはビル街に、酒屋はコンビニになっていたが、初めて所帯道具を買った家具屋はまだあった。何よりとし子を喜ばせたのは、新婚当時に暮らしたアパートが、古ぼけた思い出のベランダもそのままにそこに建っていたこと。二人は夫婦の人生のスタート時点に立ち返り、「その日」までの人生をここから新たに始めたいと思うのだった。

とし子の再入院の前夜、一家団欒の食卓ではいつもと変わらない賑やかな会話が弾んでいた。ママが退院したら、みんなで伊豆にドライブに行きたい、と甘える息子に笑って頷く夫婦。「元気なままのお母さんでいたい」とのとし子の強い願いを健大はがっちり受け止める。翌日、病院への道すがら、「その日は、暑くも寒くもない、秋晴れの日がいいな。…意外とにっこり笑って死んじゃえるかもしれない」と冗談めかして言うとし子の言葉に頷く健大は、涙の代わりに穏やかな微笑みさえ浮かべていた。

その日が来た。窓の外は雪混じりの雨。とし子が愛した宮沢賢治の詩『永訣の朝』の“あめゆじゆとてちてけんじゃ、あめゆじゆとてちてけんじゃ”の一節が、どこからともなく健大の耳に聞こえてくる。既に意識のないとし子の傍らで、健大はとし子が賢治の列車に乗り、現世を離れて銀河の彼方へ遠ざかるのを静かに見送っていた…。

これがお笑い大物タレント“南ちゃん”？と見まがうほどに、無骨で心やさしい夫 健大役の南原が新鮮。いつもは大胆な個性派永作の抑えた演技もいい。さりげない中に、かけがえのない人を喪う悲しみを乗り越える家族の愛の姿がいとおいしい。

『その日のまえに』

日本映画(139分)／大林宣彦監督

角川シネマ新宿ほか全国ロードショー公開中

© 2008 『その日のまえに』 製作委員会

